

## 認知症グループホームでの老年看護学実習における学生の学び

— 第二報 看護の役割と機能-Professionalism-に着目して —

難波 香<sup>1)</sup>\*・木下 香織<sup>1)</sup>・安藤 亮<sup>1)</sup>

1) 新見公立大学健康科学部看護学科

(2020年11月18日受理)

本研究の目的は、認知症対応型共同生活介護でのA大学看護学科の老年看護学実習における、認知症高齢者に関わる専門職の専門性についての学びを明らかにすることである。本研究に同意が得られた4年生が提出した老年看護学実習総括用紙のうち、「実習目標7：高齢者の諸問題に関わる他の専門職を知り、看護の役割と機能を理解する（Professionalism）」に記載された内容について、内容の類似性に沿ってカテゴリー化を図った。学びは109コードが抽出され、20サブカテゴリー、【利用者の健康管理】【利用者と援助者両側面でのリスクマネジメント】【その人らしさを理解した利用者の安心につながる認知症ケア】【他の専門職との連携と協働】【援助者の認知症ケアに関わる姿勢や看護観】【自律の尊重と安全への配慮における倫理的な課題】の6カテゴリーで構成された。学生は、老年期の特徴を踏まえたアセスメントやその人らしさを理解したケアの実践が看護職の役割であると認識していた。

(キーワード) 認知症高齢者、老年看護学実習、グループホーム、専門性

### 1. はじめに

わが国の高齢化率は2019年10月には28.4%に達し、今後とも上昇を続けることが見込まれている<sup>1)</sup>。人口の高齢化の伸展に伴い、認知症をもつ人も増加しており、わが国においては2012年に認知症施策推進5か年計画（オレンジプラン）の発表ののち、2015年には認知症施策推進総合戦略（新オレンジプラン）の制定を経て、2019年6月18日に認知症施策推進大綱をまとめ、「共生」の基盤の下、通いの場の拡大など「予防」の取組を政府一丸となって進めることを宣言している<sup>2)</sup>。認知症をもつ人の増加への対策はわが国において喫緊の課題であり、施策の整備が進められている状況である。介護保険制度の制定や「認知症」への名称変更などを契機に、特に高齢者福祉の場での認知症ケアの質の向上に向けた取り組みがなされてきた。一方、急性期病院では、治療優先あるいは安全管理の立場から認知症ケアの質に課題があり、日本老年看護学会による「急性期病院において認知症高齢者を擁護する」立場表明<sup>3)</sup>や「認知症ケア加算」の算定など、臨床看護実践における認知症をもつ人への対応への課題を改善すべく、取り組みが進められているところである。

看護学生の臨地実習においても、受け持ち患者の年齢も高齢化しており、認知症をもつ患者の看護を経験することも少なくない状況にあり、コミュニケーションなどの対応困難を感じたことが近年でも多数報告されている<sup>4-7)</sup>。

A大学看護学科の老年看護学の実習は、認知症対応型共同生活介護（以下、認知症グループホームとする）での実習（以下、老年看護学実習とする）と、在宅高齢者を対象に学生と教員が介護予防活動を実施する実習で組み立てられている。認知症高齢者を対象とする実習では、目的を「老年看護の対象者として的高齢者を、総合的・多角的な視点で理解する。高齢者個人の人權を尊重し、高齢者及びその家族を含めた人々への心からの関心を寄せ、生活の質を高め、生きる力を支える看護を展開できる能力と態度を養う」として、2週間の実習を行っている。認知症グループホームで受け持ちの利用者を定めない、看護過程の展開を用いない実習形態である。他の看護基礎教育機関においても、認知症グループホームでの実習を取り入れた学習成果の報告はいくつかみられる<sup>8-11)</sup>が、本学のように認知症グループホームで2週間にわたる臨地実習を展開している看護基礎教育機関は少ない。また、A大学の老年看護学における臨地実習の評価においては、認知症グループホームでの臨地実習に取り入れた教育方法の評価<sup>12-13)</sup>や臨地実習期間に設けている学内演習の効果<sup>14-15)</sup>についての検証がおこなってきた。

そこで、本研究では、A大学看護学科の認知症グループホームでの老年看護学実習における、認知症高齢者に関わる専門職の専門性についての学びを明らかにすることを目的とする。

\*連絡先：難波 香 新見公立大学健康科学部看護学科 718-8585 新見市西方1263-2

## II. A大学看護学科老年看護学実習の概要

A大学看護学科では、老年看護学実習4単位のうち、2単位を認知症グループホームにて受け持ち高齢者をもたない形態で実習を行っている。認知症グループホーム1ユニットに4名の学生を配置し、学生はスタッフの提供する援助への参加や利用者とのコミュニケーションを中心とした実習形態である。

実習目的である「老年看護の対象者としての高齢者を、総合的・多角的な視点で理解する。高齢者自身の人権を尊重し、高齢者及びその家族を含めた人々への心からの関心を寄せ、生活の質を高め、生きる力を支える看護が展開できる能力と態度を養う」に基づき、実習目標を10項目で構成している。本研究では、実習目標7：高齢者の諸問題に関わる他の専門職を知り、看護の役割と機能を理解する（Professionalism）についての学びを明らかにする。

## III. 研究方法

1. 調査対象：A大学看護学科2019年度の4年生58名のうち、本研究への同意が得られた47名。
2. データ収集方法：研究対象者の提出した老年看護学実習総括用紙に記載された内容を分析対象とした。
3. データ収集期間：2019年2月
4. 分析方法：実習目標7：高齢者の諸問題に関わる他の専門職を知り、看護の役割と機能を理解する（Professionalism）に記載された内容について、その意味内容1つごとに文章をまとめる、または文章を区切ってデータ化を行い、内容の類似性に沿ってカテゴリー化を図った。

た。分析は、研究者間で合意が得られるまで繰り返し実施した。

## IV. 倫理的配慮

学生に調査の内容や個人情報の保護、成績判定終了後に対象に依頼したため不利益や負担が生じることがないこと等について文書と口頭にて説明を行った。研究協力に同意が得られる場合は同意書への署名を求め、同意が困難な場合は白紙のままでの提出を求めた。同意書提出後、研究対象者が同意の撤回を希望する場合は、研究者に口頭で伝えてもらい、同意撤回書の署名を求めた。対象者の同意の撤回への対応のため、連結可能匿名化にてデータを取り扱った。本研究は新見公立大学倫理委員会の承認を得て実施した(承認番号：191)。なお、本研究における利益相反は存在しない。

## V. 結果

認知症グループホームでの老年看護学実習における認知症高齢者に関わる専門職の専門性についての学生の学びを表1に示した。

実習目標7：高齢者の諸問題に関わる他の専門職を知り、看護の役割と機能を理解する(Professionalism)に記載された内容を分析した結果、109コードが抽出され、コードの類似している内容を20サブカテゴリーに分類した。さらに、【利用者の健康管理】【利用者と援助者両側面でのリスクマネジメント】【その人らしさを理解した利用者の安心につながる認知症ケア】【他の専門職との連携と協働】

表 1. Professionalismに関する学びの記載内容

カテゴリー	サブカテゴリー	コード数
利用者の健康管理	服薬管理と体調の管理	5
	急変時の対応	1
	脱水予防のための援助	2
利用者と援助者両側面でのリスクマネジメント	援助者の支援体制や対応の工夫	16
	援助者がリスクを察知するための環境整備	9
	加齢変化や認知症状の理解と個人に合わせた援助方法の選択	8
	利用者間の関係性の調整	2
	利用者の安全のための居住環境の整備	6
その人らしさを理解した利用者の安心につながる認知症ケア	利用者の不安を和らげ、納得・安心につながる関わり	7
	その人らしさを踏まえたユーモアのある関わり	3
	認知症の理解と個々のベースに合わせた対応	9
	利用者の背景や行動の意図を読み取った受容的な態度	6
他の専門職との連携と協働	生活リズムの調整と認知症の進行予防	6
	各専門職種との役割の相互理解と協働	7
	外部機関との調整を図る	6
援助者の認知症ケアに関わる姿勢や看護観	施設内での情報共有や連携	4
	看護観を基盤とした関わり	5
	家族との関係構築	2
自律の尊重と安全への配慮における倫理的な課題	自律の原則と無害の原則の対立によるジレンマ	4
	倫理的な課題の解決のための専門的思考	1

【援助者の認知症ケアに関わる姿勢や看護観】【自律の尊重と安全への配慮における倫理的な課題】の6カテゴリーに類似化した。以下、カテゴリーを【】、サブカテゴリーを<>、コードを〔〕、コードの中にある会話の部分を『』で示す。

#### 1. 【利用者の健康管理】

このカテゴリーは、<服薬管理と体調の管理><急変時の対応><脱水予防のための援助>という3つのサブカテゴリーで構成された。

<服薬管理と体調の管理>は「病院へ行くという判断や、感染が広がらないように部屋で療養してもらったり、薬の管理をすることも大切」など5コード、<急変時の対応>は「看護の役割は、何かあった時（肺炎、不穏）の対応をすること」の1コード、<脱水予防のための援助>は「1日の水分摂取量を1500ml最低でも摂れるように援助されており、十分に飲水できるよう学生や周りの声かけで摂取してもらうことも脱水予防に必要」など2コードで、学生は利用者の健康管理を看護職の役割と認識していた。

#### 2. 【利用者と援助者両側面でのリスクマネジメント】

このカテゴリーは、<援助者の支援体制や対応の工夫><援助者がリスクを察知するための環境整備><加齢変化や認知症状の理解と個人に合わせた援助方法の選択><利用者間の関係性の調整><利用者の安全のための居住環境の整備>という5つのサブカテゴリーで構成された。

<援助者の支援体制や対応の工夫>は「全体を見て、自分は何の利用者さんの側で見守ってどこに座ればすぐに対応できるかを考えて座っていた」など16コード、<援助者がリスクを察知するための環境整備>は「ドアや玄関、部屋の入口に鈴がついており、利用者のリスクに対する安全対策をしている様子もあった」など9コード、<加齢変化や認知症状の理解と個人に合わせた援助方法の選択>は「加齢によるバランス保持能力、運動機能、危険察知能力の低下、防衛反応の遅延により転倒リスクが高いことに加え、認知症をお持ちの方は認知力の低下によりADLの一つ一つに転倒転落などの危険がついている」など8コード、<利用者間の関係性の調整>は「利用者同士で言い争いになることもある。そのような時は周りもいい思いをしないので、言われている方に対して、言っている方に対して、自尊感情を傷つけないように仲裁することが大切」など2コード、<利用者の安全のための居住環境の整備>は「バリアフリーになっており、つまずいたり障害物が少ない環境になっている」など6コードであった。学生は、生活の場における利用者の様々なリスクとその対策について人的・物的側面からアセスメントし、支援を実践していた。

#### 3. 【その人らしさを理解した利用者の安心につながる認知症ケア】

このカテゴリーは、<利用者の不安を和らげ、納得・安

心につなげる関わり><その人らしさを踏まえたユーモアのある関わり><認知症の理解と個々のペースに合わせた対応><利用者の背景や行動の意図を読み取った受容的な態度><生活リズムの調整と認知症の進行予防>という5つのサブカテゴリーで構成された。

<利用者の不安を和らげ、納得・安心につなげる関わり>は「今日はここへ泊まりましょう、などと帰らないという事実を突きつけるのではなく、納得していただけるような対応」など7コード、<その人らしさを踏まえたユーモアのある関わり>は「利用者さんごとに性格や気の長さなどが違い、敬語を使って声かけをすることやくださった言い方で話をするなどしたり、笑わせたりしながら、ユーモアを持った関わり方をしている」など3コード、<認知症の理解と個々のペースに合わせた対応>は「相手が集中されているときは少し待つ様子を見て声かけすることが大切」など9コード、<利用者の背景や行動の意図を読み取った受容的な態度>は「行動には意味があるため、その方がしようとすることは否定せず、その方の自己決定も尊重した声かけが必要」など6コード、<生活リズムの調整と認知症の進行予防>は「お茶やお菓子・食事の際に『〇時のお茶です。』のように、今は朝・昼・夜のいつなのか、何時なのかを伝えることで生活リズムを整えている」などの6コードであった。学生は、利用者のその人らしさを理解し、それを踏まえた援助の工夫をすることで利用者の納得・安心につながることを学んでいた。

#### 4. 【他の専門職との連携と協働】

このカテゴリーは、<各専門職種との役割の相互理解と協働><外部機関との調整を図る><施設内での情報共有や連携>の3つのサブカテゴリーで構成された。

<各専門職種との役割の相互理解と協働>は「自分の専門職以外の事にも関わることで、全体を把握しているような協働の様子がよく見られた」などの7コード、<外部機関との調整を図る>は「施設のスタッフだけでなく医療関係者も利用者をよく知って頂くことができるようにするのも看護職の役割」などの6コード、<施設内での情報共有や連携>は「職員全員がその方のゴールを理解し、共有することが大切」などの4コードであった。学生は、施設内外における多職種連携の重要性について学んでいた。

#### 5. 【援助者の認知症ケアに関わる姿勢や看護観】

このカテゴリーは、<看護観を基盤とした関わり><家族との関係構築>の2つのサブカテゴリーで構成された。

<看護観を基盤とした関わり>は「どの利用者さんにも“その一瞬を楽しんでもらう”ことを大切に援助されていた」などの5コード、<家族との関係構築>は「ご家族と本人をつなぐ役割になるためにご家族との信頼関係を築くことが大切」などの2コードで構成され、学生の老年看護観の深まりや、その看護観を基盤とした援助について示した内容が記述されていた。

## 6. 【自律の尊重と安全への配慮における倫理的な課題】

このカテゴリーは、＜自律の原則と無害の原則の対立によるジレンマ＞＜倫理的な課題の解決のための専門的思考＞の2つのサブカテゴリーで構成された。

＜自律の原則と無害の原則の対立によるジレンマ＞は「転倒の危険がある方が立ってどこかへ行こうとしているのを、戻ってください、座ってくださいというのは、本人の自由を奪ったり、自尊心を傷つけることになるが、転倒予防であるというジレンマがある」などの4コード、＜倫理的な課題の解決のための専門的思考＞は「施設側の無害の原則と、ご本人側の自律の原則で葛藤が発生しているため、何を優先する必要があるのかよく考えることが大切」の1コードであった。学生は、生活の場における倫理的ジレンマを実感するとともに、その倫理的課題を解決するための専門的な思考の重要性について学んでいた。

## VI. 考察

実習総括記録に記された「高齢者の諸問題に関わる他の専門職を知り、看護の役割と機能を理解する」に関する内容を分析した結果【利用者の健康管理】【利用者との両側面でのリスクマネジメント】【その人らしさを理解した利用者の安心につながる認知症ケア】【他の専門職との連携と協働】【援助者の認知症ケアに関わる姿勢や看護観】【自律の尊重と安全への配慮における倫理的な課題】の6カテゴリーにまとめられた。以下、6つのカテゴリーから、利用者の心身の安全を守る支援、多職種連携、支援の基盤となる看護観の3つの視点に沿って考察する。

### 1. 利用者の心身の安全を守る支援

学生は、老年期の特徴を踏まえた観察やアセスメントを行いながら、その人らしさを理解したケアを提供することで、利用者の心身の安全を守ることが認知症グループホームにおける看護職の役割であると認識していた。

【利用者との両側面でのリスクマネジメント】では、グループホームという生活の場におけるリスクやその発生要因についてアセスメントし、多方面からの支援について実践を通じた学びが得られていた。先行研究においては、安全を守ること、自分のペースで生活することといった【生活援助の工夫】や【環境を整える】<sup>8)</sup>のカテゴリーでまとめられている。本研究では、＜援助者の支援体制や対応の工夫＞や＜加齢変化や認知症状の理解と個人に合わせた援助方法の選択＞に関する学びが多く見出されており、受け持ち高齢者をもたない実習形態のなかでも学生は日々の関わりにおいて、看護過程の思考に沿って、老年期の身体・認知機能や個人の特性を踏まえた個別のアセスメントや援助を行っていることが示された。

【その人らしさを理解した利用者の安心につながる認知症ケア】では、認知機能の低下に伴う生活への影響や利

用者の個性を理解し、個人に合わせた援助の工夫に関する学びが得られていた。実習当初は帰宅願望やケアへの拒否がある利用者に学生も戸惑いを感じていたが、施設スタッフの関わりによって利用者が安心して納得する姿をみることで、その人らしさを踏まえた援助の重要性について実感していた。先行研究において、学生は臨地実習の場で模範となる指導者あるいは担当看護師と出会い、その動きを見て学び、対象からの信頼獲得および相互作用の促進に必要な姿勢や態度を捉えていたと述べられている<sup>16)</sup>。A大学は利用者、施設スタッフと生活空間を共にする実習形態であるため、学生はスタッフの利用者への関わりをつぶさに見ることができる。このような環境で、学生が認知症ケアの専門性に触れることで、具体的な支援方法の学びの効果を高めることにつながっていると考えられる。

### 2. その人らしい生活を支えるための多職種連携

利用者のその人らしい生活を支えるために、施設内外で様々な職種が連携・協働しており、その調整を図る中で看護職が機能していることを学生は理解していた。

先行研究においては、【医療チームの一員として果たすべき責務】とカテゴリー化され、学生は対象が必要としている看護を実践するためには、他職種と連携をとり、その中で看護専門職としての役割を認識し行動に移すことが必要であると捉えていた<sup>16)</sup>。A大学の実習では、【他の専門職との連携と協働】とカテゴリー化され、生活の場における協働のあり方を示す学びが得られていた。生活援助における介護職との連携や通院介助時の医師への情報提供、介護支援専門員によるケアマネジメント等、施設内外で様々な職種が連携することにより、ケアの質の向上が図られ、利用者のその人らしい生活が支えられていることを学生は認識していた。

生活の場における看護職の役割として、先行研究では、バイタルサインの数値や機械に頼らず、利用者の小さな変化に気付くことの大切さを示す【看護職が配置される意味】<sup>8)</sup>のカテゴリーにまとめられている。A大学の学生は、【利用者の健康管理】がグループホームにおける看護職の役割であると認識していた。学生は、看護職の視点から観察とアセスメントを行い、＜脱水予防のための援助＞として利用者へお茶の存在を示したり、飲水を促すなど生活援助の中に工夫を取り入れながら、利用者の健康を支えるための支援を実践することができていた。学生は協働のあり方を知り、各専門職種の専門性について理解することで、生活の場における看護職の役割を認識し、自らも実践に移すことができたと推察される。

### 3. 支援の基盤となる看護観や倫理的思考

【援助者の認知症ケアに関わる姿勢や看護観】では、学生は高齢者を一人の人間と捉え、包括的にケアを提供する

といった援助者としての姿勢に関する学びを得ていた。先行研究では、人生の大先輩と接する際に自分たちがどうあるべきかという【老年者を尊重する】<sup>17)</sup>のカテゴリーでまとめられている。A大学の老年看護学実習においても、利用者の語りから個人の時代背景や生活背景、人生経験の多様さを学ぶことで、人生の先輩として尊敬の気持ちを抱くようになったことが示された。また、それらが基盤となることで、その人らしい生活を支えるための支援に関する学びへとつながっていると推察される。

【自律の尊重と安全への配慮における倫理的な課題】では、専門職として求められる倫理観に関する学びが示された。プロフェッショナルイズムは、専門職倫理とも訳され、利他的奉仕など個人的なものに加え、専門家集団としての社会的責務や職業活動における倫理性が重視されている<sup>18)</sup>。学生は、自身が感じたジレンマが倫理的課題であると認識し、多職種で協働しながら、その時最善とするケアを提供することが専門職としての責務であると捉えていた。また、最善のケアを提供するためには、自身の倫理的感受性を高めることの必要性を示す学びも得られており、学生は支援の基盤として看護観や倫理的思考が専門職に求められると認識することができたと推察する。

## VII. 本研究の限界と今後の課題

本研究は対象校が1校であり、1学年の学生の学びの分析であるため、一般化には限界がある。継続的に調査を行うとともに、認知症高齢者に関わる専門職の専門性以外の実習目標についても、A大学の实習形態の特徴を確かめていくことは今後の課題である。

## 謝辞

本研究を実施するにあたりご協力いただきました学生の皆様に心から感謝申し上げます。

なお、本論文は日本看護学教育学会第30回学術集会において発表した内容に加筆したものである。

## 文献

- 1) 内閣府: 令和元年版 高齢者白書, [https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2020/zenbun/pdf/1s1s\\_01.pdf](https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2020/zenbun/pdf/1s1s_01.pdf), 2020-8-1.
- 2) 厚生労働省: 認知症施策推進大綱, <https://www.mhlw.go.jp/content/000522832.pdf>, 2019-10-1.
- 3) 日本老年看護学会: 「急性期病院において認知症高齢者を擁護する」日本老年看護学会の立場表明2016, <http://184.73.219.23/rounenkango/news/pdf/老年看護>

- 立場表明 (公開用) 160820.pdf, 2019-10. 1.
- 4) 森幸弘, 中尾奈歩, 福田峰子, ほか3名: 老年看護学臨地実習における学生が認識する老年者とのコミュニケーション困難の内容と要因, 中部大学生命健康科学研究紀要, 14, 35-44, 2018.
  - 5) 藤原李圭, 蓬詩織, 鈴木千絵子: 認知症高齢者の中核症状に対するイメージとBPSDへの対応知識および困難感について 看護学生のアンケートから, 関西福祉大学研究紀要, 21, 1-11, 2018.
  - 6) 川上遥, 小松遥香, 中山朋美, ほか5名: 学生が初めて認知症患者と接したときに困難と感じたことの影響, インターナショナルNursing Care Research, 12(1), 153-160, 2013.
  - 7) 石垣範子, 深江久代, 今福恵子, ほか1名: 介護老人保健施設での老年看護実習における学生の困難感について, 静岡県立大学短期大学部研究紀要, 26, 43-55, 2013.
  - 8) 道繁祐紀恵, 奥山真由美, 甲谷愛子, ほか1名: 介護老人保健施設およびグループホームにおける認知症高齢者に対する看護学生の学び, 山陽論叢, 21, 43-53, 2014.
  - 9) 福岡真理, 小楠範子, 木村孝子: 認知症対応型グループホーム実習における看護学生の学びの実態, 鹿児島純心女子大学看護栄養学部紀要, 17, 43-48, 2013.
  - 10) 棚崎由紀子, 光貞 美香, 田村 一恵: グループホーム実習に関連した看護学生の思いと認知症高齢者イメージの変化, 宇部フロンティア大学看護学ジャーナル, 5(1), 37-42, 2012.
  - 11) 上野まり, 廣川聖子, 間瀬由記, ほか1名: 認知症高齢者グループホームでの一日実習における看護学生の学び (第1報) 学生の実習記録から, 神奈川県立保健福祉大学誌, 6(1), 3-11, 2009.
  - 12) 木下 香織, 古城 幸子, 馬本 智恵: 老年看護学臨地実習に導入した「利用者体験」の教育効果と課題, 看護・保健科学研究, 8(1), 169-176, 2008.
  - 13) 木下香織, 古城幸子: 認知症グループホームの臨地実習に導入したユマニチュードの効果 看護学生がとらえた入所者の反応からの評価, インターナショナルNursing Care Research, 14(2), 145-153, 2015.
  - 14) 木下香織, 古城幸子: 老年看護学実習における学内演習方法の教育効果(その1) ループリック評価表の活用効果と演習方法における課題の明確化, 新見公立大学紀要, 35, 23-26, 2014.
  - 15) 古城幸子, 木下香織: 老年看護学実習における学内演習方法の教育効果(その2) 文献抄読演習の役立ちと学びの広がり, 新見公立大学紀要, 35, 7-12, 2014.
  - 16) 西川美樹, 細田泰子, 紙野雪香: 看護系大学の学生における看護プロフェッショナルイズムの認知, 日本医学看護学教育学会誌, 27-2, 1-8, 2018.
  - 17) 杉野朋子, 丹羽さよ子: 「老年看護学実習」における学

- びの分析 学生の実習レポートの分析より, 鹿児島大学  
医学部保健学科紀要, 21, 13-19, 2011.
- 18) 寺岡章雄: 薬剤師のプロフェッショナリズム, 社会薬  
学, 34(2), 61-62, 2015.